

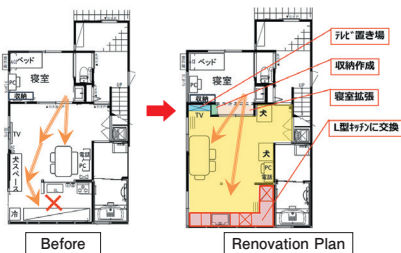
「P-1グランプリ」。それはリフォーム実績年間2万件以上を誇るパナソニックエイジフリーの社員が、「プランナーとしての人間力」「プランニング力」「プレゼン力」を競い合う、年に1度の社内コンテストだ。2001年から始まり、2024年1月23日、第23回が開催された。今回はパナソニックエイジフリー近畿リフォーム課住環境プランナーの清水憲太さんの事例を紹介する。20歳代の若さで車いす生活となった男性が暮らす自宅を、趣味の料理ができるようにリフォームして社会復帰への意欲を芽生えさせることができた事例だ。



清水さん

Mさんは交通事故に遭い脊髄損傷で両下肢の機能を失った。パナソニックエイジフリーは退院直後のリフォームを手がけ、トイレでの排泄や食事・脱衣・入浴など自宅内での生活を車いすを利用するMさんが自立して行えるようにした。それから1年経ち、Mさんの両親から清水さんへ再度、リフォームの相談が持ち掛けられた。

「キッチンを改修したい」と母。聞けば、前回のリフォームで息子のMさんは身の周りのことはほぼ自立できているが、外出はほとんどしなくなってしまうという。パソコンやゲームをして過ごしている息子の将来が不安になり、事故に遭う前、料理が好きでよくキッチンに立って得意の卵焼きを家族に振る舞っていたことを思い出した。もう一度料理



することができようになれば自信が出てくる。幅が出るのではないかと考えたのだという。

清水さんは、住環境プランナーとして単にキッチンを車いす対応にするだけでなく、

## 『自立から自律へ』——趣味の料理で家族に笑顔を！

「本人の自立した人生につなげる環境整備」と「ご家族も楽しく料理できるユニバーサルデザイン」の両立を課題として設定し、社会復帰という自立支援を長期目標とするリフォームを提案した。

Mさんの身体状況と家族の要望を丁寧にアセスメントし、改修をプランニング。施工前にショールームで動作確認を行い、吊戸棚や天端高さなどを決めるなど、家族全員がこだわりに対応しただけでなく、高性能の空気清浄機の設置で飼っている犬の臭いの軽減など住環境全般への配慮も提案し、施工した。

その結果、Mさんは調理だけでなく、食器洗い、片付けまで自立して行えるようになり、「大満足しています」との声を聞くことができた。Mさんが自分で料理できるようになったことで、仕事で帰りが遅くなった時も家族の食事の心配をしなくて済むようになり、母の負担も減った。全員の暮らしの改善を実現することができたのである。

そして半年後、料理で自信をつけたMさんは就労支援事業に相談。長期目標とした社会復帰への道へ踏み出した。清水さんはこのリフォームについて次のように振り返る。「若い世代が求職活動をしていない最も多い理由は病气やケガです。住環境プランナーとして何ができるかを考えた時、住環境下における自立の実現をお手伝いすることではないかと思いました。自分でできる『自立』とともに自分で考えて生活できる『自律』も大切にしたりリフォームを提案していきたい」

小野泰隆常務執行役員は「交通事故による障害の方のための改修で、生活ステージに合わせ、必要なことを積み重ね自立から自律へと踏み出す良い事例」と評価した。



改修後

改修前



くらしの中で「できる」ことを増やし、そして、次に「やりたい」ことに向かっていただきたい、そんな思いをシンボルマークにしました。パナソニックの介護用品で「心身が前向きに、その先に歩みだす」。私らしくいきいきとしたくらしを実現できる社会を創ることそれが私たちの存在意義です。



パナソニック エイジフリー  
エイジフリーショップ

お問い合わせ先：営業企画部 06-6908-8122

